『レア子♥ベス子♥ティナ子♥三匹娘子育て奮闘記』

此の三匹娘が、夫々の出生の地から我家にやって来たのは四年前の丁度今頃であった。　ベス九月十六日生、レア九月十八日生、ティナ九月三十日生、と親も血統も違う犬ではあったが、まるで姉妹そのものだった。

ジャックにしても、ミジィーにしても、ほぼ成犬になってから飼い始めた私にとって、この子達が初めて育てるラブの子犬だった。

先ず、誰でもが同じ様に名前を考えなければならない。　五匹の犬達が間違わない様に、出だしの発音が違うもので考えた。　イエローのレアは、丁度レアチーズケーキの様な淡いクリーム色をしていたので『レア』。　ジャックとミジィーの孫娘であるティナは、私の大好きな動物比較行動学者のコンラート・ローレンツさんのペットのアヒルの名前『マルティナ』を貰う事にした。　残る一匹は、意味もなく『アナベス』と決った。

普通犬は大抵一匹で飼う人が多い。　人夫々、考えが色々であるが、私は複数又は、子犬は二匹で飼う方が人間は楽が出来ると信じている。　相手が居れば、よく遊びよく食べる、寂しい事もないし、特に自転車運動の様な単調な動きに比べて、犬は犬同志レスリングをさせた方が全身の筋肉を鍛える事になるので最も良い。又ストレスも発散出来る。　それから、良き先輩やボスが居れば、お手本として役に立ってくれる。　犬は社会制の動物なので、連鎖反応を起し安い。　無駄吠えをする犬の所へ来た犬は、大抵同じ様になるし、おとなしく静かな犬と一緒にいる犬は矢張静かである。

我家では、初め二匹の子犬を飼うつもりだったが、ちょっとした事で三匹になった。　その行きさつはさて置き、三匹も一ぺんに果たして育てられるのかしら・・・と内心不安もあった。　ジャックやミジィーだけならまだ良い、犬が増えるとそれだけ、ただでさえ狭い家の中が、息苦しくなる。　犬の健康の為にも、三匹娘が加わってから、全部外で飼い始める事になった。

勿論庭には全てフェンスがはり巡らせて囲いはしてある。　此の頃の庭は、未庭らしい庭であった。　半分以上が

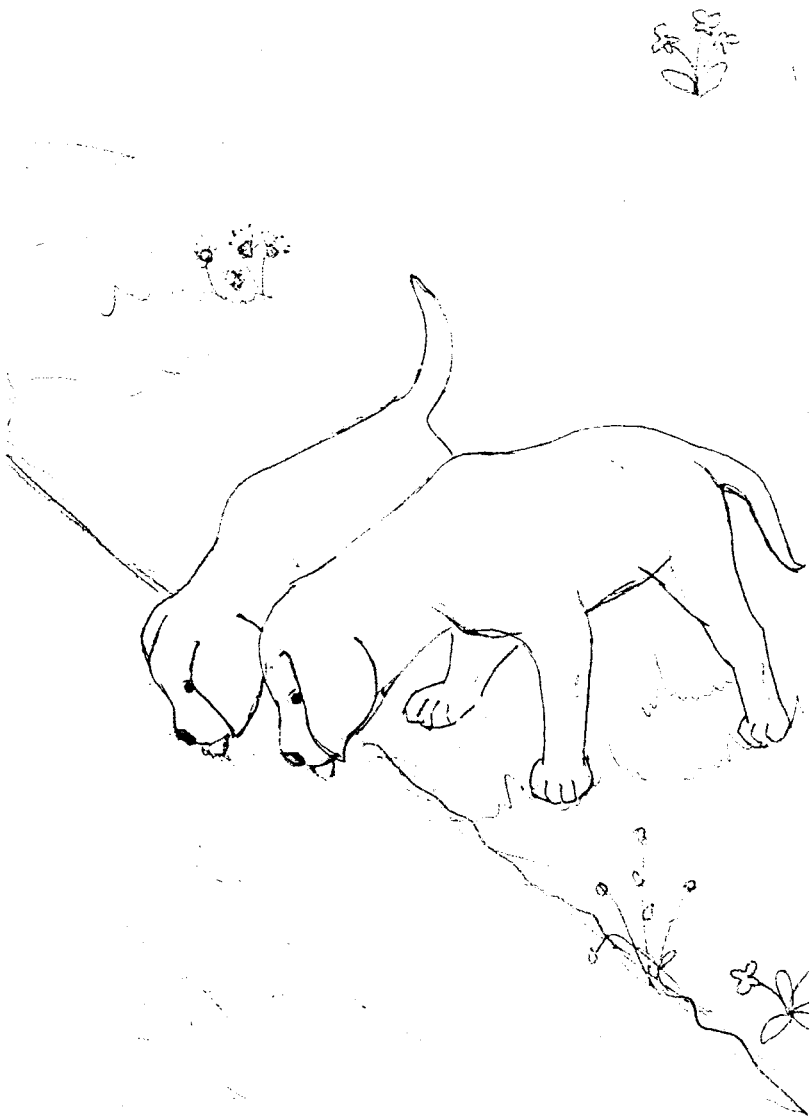
コンクリートで、残が土、此の土の部分が門から玄関に添って軽い傾斜面になっていた。　そこに点々とサツキが十本位はあった様に記憶しているが、結果的には、低木は全て根こそぎ引抜かれるか、再起不能の枯木と化し、地面は穴ぼこだらけ。　ましていたる所、斜面をどんどん横に掘った為、突如として1メートル四方位の範囲でドスッと庭の一部が陥没する。　私は犬達の好きにさせていた。　毎日うるさく叱っているのは良くないし、いけない時にはよく聞分ける犬達だったので放っておいた。　人間だって、幼いうちはめちゃくちゃ遊ぶし、其遊びの中から色々学ぶ。歯が抜け変わる時期は何でも噛みたがるし、成長すれば何れ止む、そう思っていた。

此の頃のチビ達にとって、このサツキの茂みは格好の遊び場所となっていた。　木の蔭に隠れては、近ずく相手の目の前にパッと踊り出て一撃をくらわす。　やられた方も負じとやり返す・・・そのうちに追い掛けごっこになり、三匹遊びは思わぬ場面の展開があって面白い。　私は、縁側にジャックやミジィーと並んで、このレスリングとも追い掛けごっこともつかない忍者ごっこを見ているのが好きで飽きる事がなかった。

根本的には、人間の子も犬の子育ても同じだと思う。　いけない事とやって良い事のけじめをはっきりさせ、理解し安い様に注意も与えなければならない。　又、その成長に合せて、やりたい事を思いっ切りやらせてやるのも大切な事だと思う。　今の、学校からすぐ塾へ・・そして家族と夕食も一緒に取れない様な、ハードスケジュール体制の塾に通っている子が此の辺にも沢山いる。　未だ未だ小さいのに・・・今しか出来ない事っていっぱいあるのに・・・勉強だけが中心の生活なんて、此の子達が大人になって幼い時代を振返った時何が残っているだろう・・・なんて気の毒にってしまう。　私は、子供の時からやりたい事は殆ど許されて育った、両親には今でも大変感謝している。（親は見放していたのかもしれないが）女だてらにアイススケートではホッケーはやるし、オートバイにも夢中になった。　今でも御近所のお年寄りは、『あんたが、今井町の暴走族の走りじゃった・・・。』と言って笑う。

話が横道にそれてしまったが、朝起てカーテンを開けると、『あー、又やってる！』これが此の頃の我家の合言葉

になった。　丁度、植木屋さんに売っている様な、根を丸く切られた状態の植木をチビどもが『やったぜ！』と、いかにも得意そうな顔をしてズルズル引張り回している。　他のチビは、隙あらば取ろうとその回りをグルグル走回って小躍りしている。　ジャックやミジィーは、といえば呆れて生あくびをしながら見ているだけ・・・。　そうして一本、又一本と我家の庭木の姿は消え、最後にはこざっぱりとした、草木一本生えないボコボコの土がむき出しになった庭が残った。　まるで此の世の果てと化した我家の庭も、それから間もなくある事件がきっかけで、全部コンクリートに作り変えるという大工事にとりかからざるおえなくなった。



（つづく）